

エ 古典（古文）の変遷

(7) 大問ごとの過去の問題傾向分析

古文は昭和53年より30点の配点で出題が始まったが、昭和63年から大問が4題に増加したことに伴い、配点が20点に変更された。最初の2年については、昭和53年が『奥の細道』冒頭「月日は百代の過客にして…」、昭和54年が『徒然草』「高名の木のぼりといひし男…」と教科書にも頻繁に採択されている大変有名な文章から出題されている。そのためか正答率は昭和53年が63.9%、昭和54年が70.5%と極めて高い。出題内容は、部分的また単語レベルでの発問が多くみられ、基本的語彙や文法事項の確認に重きが置かれている。

その反動からか、昭和55年は『平家物語』「殿上の闇討の事」からの出題であるが、あまり馴染みがないためか難易度が上がり、正答率は34.2%と大きく後退している。翌昭和56年『今昔物語』についても正答率は38.8%と低迷しているが、両年の共通点として古文の本文の前に現代文による長いリード文が示されているということが挙げられる。解答以前に、本文の背景や状況が複雑で、イメージするのに困難を伴っていることが予想される。

昭和62年頃まで、設問の種類として特徴的なのは、まず文学史の知識を問う問題が繰り返し出されていることである。作者や時代を問う、作品のジャンルを問う、同時代作品あるいは同ジャンル作品を選ばせるというパターンがある。次に、本文で省略されている表現を補う、あるいは故意に本文の一部を伏せておいて、あるべきものを補うという空欄補充形式の出題が続いているのもこの時期に目立つことである。また、地の文と会話文を識別させる問題も平成2年までしばしばみられる。

口語訳を問うものは、最近においても出されてはいるが、特に昭和62年までは全体における大きなウェイトを占めていた。語句の読みを問う出題についても、同じような傾向にあった。逆にここ10年ほどは心情理解についての出題がなされるようになってきている。しかもこれが生徒には苦手のように、正答率30%台の難問となっていることが多い。一方、内容把握に関するものは、変わらず出題されている。

文法については昭和61～平成12年まで1、2年ごとに出されているが、それ以降は出題がない。格助詞「が」「の」の用法に関する出題が最も多く、「ゐ」の行と段についても2回出題されている。係り結びは、係助詞と結びの語を合わせて抜き出させる、本文の係助詞部分を空欄として選択させる、係助詞を指示してその結びの語を抜き出して答えさせる等の形で出題されているが、昭和57、59年は「こそ～已然形」について（いずれも結びは「けれ」）であり、以後平成元、7、15、18年の出題はすべて「ぞ～連体形」に関する出題である（いずれも結びは「ける」）。平成7、15年はいずれも本文から係り結び箇所を「ぞ～ける」と抜き出させる形式の設問であるが、正答率は平成7年の約60%に対し、平成15年は約40%にまで低下している。平成18年は係助詞「ぞ」を特定し、その結び部分を抜き出させている問題なので、平成7、15に比べると答えやすく、正答率は約62%であった。これらのことから、「係り結び」という意味を十分には理解しておらず、ただ単純に「ぞ」が来たら「ける」と機械的に暗記しているだけということもあるのではないかと懸念される。

問題の推移を見てくると、文学史、文法事項、基本的語彙などの知識を問うことは少なくなってきており、むしろ言葉の意味にしても文脈を通して読み取らせるなどの読解力重視の方向にきているようである。また本文を読み込む中で、登場人物の心理を理解させるという設問が増えている。しかしこのような問題には、表面的な読みだけでは対処しきれず、言外の含みをも察することが必要となってくるが多いため、いずれの年度でも正答率は30%台にとどまっている。

(イ) 分析資料の10年ごとの傾向

a 昭和62年

- (a) 直前からの接続のみを見て、後への接続を考えていない。読みが表面的で、前後の文脈のつながりを正しくとらえることができない。
- (b) 語句の意味については、現代語に近い用法のものは正答率が高いが、現代語で使われていても意味が定着していないものは苦手である。
- (c) 内容把握については、先入観にとらわれて、柔軟な理解ができない。
- (d) 選択肢を吟味し、その内容の微妙な差異から、より適切なものを選ぶ力が必要である。
- (e) ジャンルは随筆についてはよく知っているが、説話は定着が低い。

中学段階で扱われた作品そのものは理解していても、応用が加わると未知のものと感じてしまい入り込むことができない。文章全体の流れを正確にとらえる力の育成が求められる。

b 平成9年

- (a) 助詞を含む部分の、文の成分に対する分析力がない。固定観念や他の部分に引きずられ、意味を主眼とした文の成分を見ようとしない。助詞単独ではなく、文の成分や係り受けに注意させ、前後関係から訳を考えさせたい。
- (b) 対象を客観化できず、決め付けや短絡的な思い込みが生じやすい。

文章の前後関係を読み取れないため、全体を構造的に理解できていない。各段落を関連付けて読ませる指導や、全体を理解した上で部分を読み取らせることを大切にしたい。入門期には古文に慣れるというねらいから、文法や重要古語の暗記に偏らないように留意すべきである。

c 平成19年

- (a) 文脈の中で古語をどう解釈するか、部分のみではなく、文脈や状況を踏まえ、最適な訳語を考える習慣付けをさせたい。
- (b) 内容理解のために、文脈に従って丁寧な読解をする力が求められる。
- (c) 文脈に即して人物を特定しながら読み進める力に大きな個人差が生じている。
- (d) 直近の表現にのみ目がいきってしまい、全体を見渡せない。

単語や部分のみでの解釈ではなく、全体を見渡して人物関係をつかみ、頭の中で物語を構築する力に個人差がある。大局的な読解のための指導が求められる。

(ウ) 学習指導要領の変化との関係から

昭和35年の指導要領では、古典の内容に関する記載の中に「文化遺産としての古典」という表現があり、古典学習の意義を大きく構える姿勢が感じられる。昭和45年のものには「国語に対する愛情」という表現もみられるが、昭和54年のものからは、これらの表現はなくなっている。「(古典としての基本的な作品を読んで) 心情を豊かにする」という目標は、昭和35、45年にも掲げられているが、昭和54年には「古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」という表現に改まり、さらに平成元年以降は、古典の目標としてではなく、国語全体の目標として最初に「思考力を伸ばし心情を豊かにし」と掲げられ、より重きが置かれるようになっている。平成10年のものでは、これに「伝え合う力を高める」という点が加えられている。

文法の扱いについては、昭和45年は「文語文法の指導は作品の読解に即して行う程度にとどめる」とあるが、昭和54年には、「文語のきまりについては文章の読解に即して行う程度とすること」と若干易しい表現に改められている。関連性があるのかどうか、昭和53年からオリエンテーションテストの中に古典問題が出題されるようになったが、最初の数年間は、文法については出題されていない。

最初の出題は昭和61年で、以後特に平成2年からは5年連続して出題されている。平成元年の学習指導要領で「文語のきまり」というそれ以前の表現が、再び「文語文法の指導」という硬い表現に戻されたことも、文法重視の傾向を促しているのかもしれない。平成10年の学習指導要領では「文語文法の指導は読むことの学習に即して行い…」とソフト路線に変わっているが、平成12年を最後にストレートに文法の知識のみを問う出題がされなくなったことと関連性はあるのだろうか。

読むことに関して、平成元年からは朗読に加えて、音読や暗唱も取り上げられており、古典の調子を味わい、親しみをもつことが述べられている。

文学史に関する記載は、昭和35年のものには、「文語のきまり（かなづかいや文語文法など）や文学史に関する指導は作品の読解に即して行う」とあるが、以後「文学史」という言葉そのものが指導要領の中に出てこなくなっている。

また平成元年から、教材選択の際に配慮すべき点の一つとして、「我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」という観点が盛り込まれている。平成10年には更に「広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと」という点が加わって、世界の中の日本ということをより強く意識した内容となっている。

総じて見るに、知識面での暗記を重視した読解よりも、まず古典に親しむこと、それによって心情を豊かにし、思考力を養っていくことを重視する路線に移ってきている。

(I) 古典分野の出典及び出題内容一覧

年度	出典	配点	傍訳	主題	語句読み	語句意味	指示語内容	内容把握	口語訳	心情理解	抜出	論旨把握	題名	段落	空欄補充	会話	文学史	一文挿入	文法	仮名遣	係結	韻文大意	掛詞	音便	背景
昭和40年度		20				3	1	2											4						
昭和41年度		25				1		1	2							4			4						
昭和53年度	奥の細道	30				2	1	2	2						1										
昭和54年度	徒然草	30					1	3	1			1				2	2								
昭和55年度	平家物語	30		1			1	3	2						1	1									1
昭和56年度	今昔物語	30						1	1	1	2		1												
昭和57年度	徒然草	30		1	1			1	1						1		1				1				
昭和58年度	枕草子	30	有	1	1	1		2							1	1	2							1	
昭和59年度	徒然草	30	有	1	2	1		1	2								2				1				
昭和60年度	宇治拾遺物語	30	有		2	2		1	1			1			1		1				1				
昭和61年度	徒然草	30	有	1					3			1			2		2			1					
昭和62年度	宇治拾遺物語	30				2		1	1	1		1			1		2								
昭和63年度	沙石集	20	有			1		2				1				1				1					
平成元年度	古今著聞集	20	有		1			2				1				1					1				
平成2年度	御伽草子	20	有	1	1	1		1								1				1					
平成3年度	富士谷御枝の文章	20	有			2		1	1			1								1					
平成4年度	徒然草	20	有			1		2			1	1								1					
平成5年度	古今著聞集	20	有	1		1		2			1									1					
平成6年度	古本説話集	20	有			1	2	1		1	1									1					
平成7年度	宇治拾遺物語	20	有			1		2	1												1				
平成8年度	醒睡笑	20	有	1				2			1	1								1					
平成9年度	浮世物語	20	有	1		1		1		1				1											
平成10年度	紀行（建部綾足）	20	有	1	1	1		1		1	1														
平成11年度	宇治拾遺物語	20	有	1	1		1	2												1					
平成12年度	大和物語	20	有	1		1	1			1										1			1		
平成13年度	古今著聞集	20	有	1		1		2													1		1		
平成14年度	近世俳句俳文集	20	有		1	1		1	1													1			
平成15年度	浮世物語	20	有		1		1	1		1								1			1				
平成16年度	俊頼髓脳	20		2		1					1	1											1		
平成17年度	発心集	20						2	1	1	1	1													
平成18年度	古本説話集(H6)	20	有			1	2	1		1											1				
平成19年度	古本説話集	20	有	1		1		1		2	1														
計				16	12	28	11	47	20	10	10	11	1	1	8	11	12	1	18	2	6	3	1	1	1